

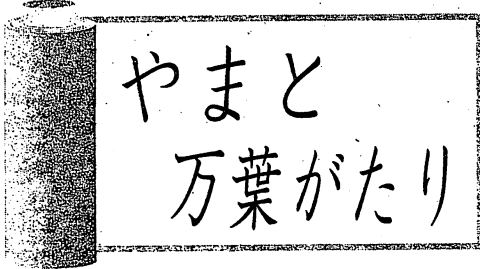
# 櫛も見じ 屋内も掃かじ

## 草枕 旅行く君を 斎ふと思ひて

作者未詳(巻十九・四二六三)

この歌は、孝謙天皇の即位2年目に任命された遣唐使が唐へ向かって出発する少し前、天平勝宝4(752)年閏3月に大伴古慈悲の家で催された狂行の宴席において大伴村上和と大伴清継らによって歌われました。この時の遣唐使では大伴古麻呂が副使に任命されており、大伴氏の一族

をはじめとする人々が古麻呂らの行路安全を願って歌を披露しました。歌の脚注に「作主未詳」とあり、古くから伝わる歌を記憶していた村上らが宴席で唱和したと考えられます。女性とみられる歌の主人公は、髪を美しく飾るための櫛、家の中をきれいにするための掃除などを身の回りか



ら返けることで、危険な旅に出ている君の安全を祈っています。身だしなみや美観をあって整えないこのような行為は「斎う(身をつつしんで祈る)」という語の印象から遠いようにも思えます。しかし、航海の安全を願うこうした習慣は、古くから我が国に存在した

【訳】櫛も見まい、家の中も掃くまい。旅行く君のために慎んで祈ろうと思ひて。

3世紀ごろの日本列島における習俗を記録した『魏志倭人伝』に「持衰がつつしまなかつた」という理由で、よると、倭人が海を渡って中国に往來する際、このように航海の安全を祈る者が通常とは異なる形で生活を送る者や、頭髪を整えずに伸ばし放題、汚れた衣服を着たままに、我が国に広く見られ、我が国でも弥生時代から続く

【訳】櫛も見まい、家の中も掃くまい。旅行く君のために慎んで祈ろうと思ひて。

きわめて古い習俗でした。「斎う」とは、そうした古い習俗に由来する行為と考えられます。また、この歌を伝誦する人が一度の宴席に複数名存在することから、奈良時代までこの習慣が広く知られていたこともわかります。

このように『万葉集』には、日本の基層文化を探る手がかりが多く残されているのです。(県立万葉文化館主任 研究員・竹内亮)

# 春霞

## 春日の里の

## 植子水葱

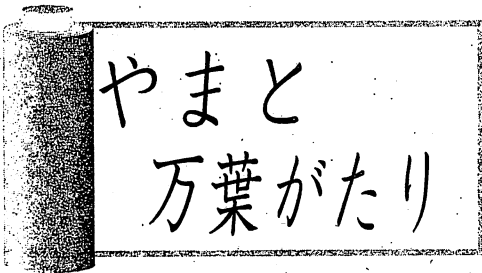
### 苗なりといひし 枝はさしにけむ

大伴駿河麻呂(巻三・四〇七)

1月は、旧暦の春にあたります。春の景物にはうぐいすや梅、柳などがありますが、霞も代表的な景物の一つです。たとえば春の歌から始まる巻十の冒頭には霞の歌が並び、古事記中巻末の神話には春山之霞壯夫という名も見えます。

霞から始まっている季節の歌に見えますが、巻三の「譬諭歌」の中にあります。「たとえ」を用いており、謎解きが楽しめる恋の歌です。

この「春霞」は季節には関係なく、「かすみ」と音の近い「かすが」を導くための枕詞です。春日は平城京の



東の郊外で、子水葱は今でいうミズアオイです。その苗が枝を伸ばす、とは、少女が大人になることを意味しています。

この歌の題詞によると大伴信備駿河麻呂が同族の坂上家の二嬢を婿う時の歌で、植子水葱は駿河麻呂が二嬢を嫁えたもので

す。2人は婚約者だったようで、この歌より前に、二嬢の母である大伴坂上郎女が一族の宴会で「山守のありける知らにその山に標結ひ立てて結ひの恥しつ(山の番人がいたのも知らないで、麻呂が、もし恋人がい

その山にしろしを結んで、『結ひの恥』をし「たことよ」(四〇二)と歌っています。恋人がいたのでも知らずに嫁と婚約させて恥をかけた、という意味です。この歌に対し駿河(県立万葉文化館主任 研究員・阪口由佳)

【訳】春霞たつ春日の里に植えた子水葱は、まだ苗だといっていた枝がもう伸びたでしようか。

たとしても、あなたとの約束は守ります、と返事をしています(四〇二)。そして約束の通り、成長した二嬢に妻問いをしてい

万葉集の編者とされる大伴家持も、坂上郎女の娘・坂上大嬢を妻としました。婚姻により大伴一族の結束を強めるためとも考えられています。

東の通り、成長した二嬢に妻問いをしてい

わがかります。